

第178回くらしの植物苑観察会 2014年1月25日(土)

「歴史に見る千葉の里山」

西谷 大(国立歴史民俗博物館研究部 考古研究系教授)

昨今、「里山」が注目されています。
 しかし里山は歴史的な要因や人間側の働きかけによって、その姿をたびたび変えてきました。村落周辺の景観は固定的だったのではなく、その姿は歴史とともに常に変化してきたと捉える必要があるとおもいます。



現在、国立歴史民俗博物館では、千葉県の房総丘陵で、近世から現代における村の歴史を、自然環境・自然資源利用の歴史、それに生業の歴史との関係性を含めて明らかにする共同研究をおこなっています。明らかになってきたのは、「日本人は自然を大切にしてきた」といった安易な枠組みにはあてはめることができないということです。

昭和30年代以前の村の周辺は、写真にみるように山を焼き払うことで広大な草地を作っていました。また、房総丘陵の小櫃川沿いでは、現在も利用されているトンネル状の灌漑用水路(二五穴)を江戸の終わりごろから盛んにつくるのですが、これは現代でいえば、公共工事にあたるような大規模な土木事業でした。

彼らの自然とのつきあい方をみていると、「自然との共生」というよりもむしろ、人間側に有利になるよう「自然をいかにして飼い慣らすか」という行為を、繰り返し試行してきた歴史ではなかったかと推測しています。今回は、地元千葉県房総丘陵の事例を紹介しながら、日本人の自然利用について考えてみたいとおもいます。

.....
次回予告 第179回くらしの植物苑観察会 2013年2月22日(土)

「くらしを守るもりやはやし」 青山 宏夫(国立歴史民俗博物館研究部 歴史研究系教授)
 13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要